

日本語と英語における「目的語」の 表現形式の比較の試み (2)

小川 明

(平成 12 年 10 月 5 日受理)

Differences in the Expression of Object between Japanese and English (2)

Akira OGAWA

(Received on October 5, 2000)

キーワード：目的語，助詞，前置詞，対照言語学

Key words: object, particle, preposition, contrastive linguistics

10. 本論の目的は、動詞の示す動作の対象である「目的語」が、英語と日本語において、それぞれどのような形式で表現されるのか調べ、このふたつの言語の間にどのような表現上の差異が見られるのか比較することである。

以下(1)(東京家政大学『英語英文学研究』第6号所収)で論じたことを要約しながら、さらに展開してみたい。このような「対象」の表現形式の比較の試みは、寺村(1992:199-202)に見られる。たくさんの動詞を日本語と英語について観察すると、いくつかの類が浮かんでくると彼は予測する。たとえば、そのひとつは、

(25) 意味の種類： 他者に直接働きかけ、それに影響を及ぼすような動作

表面構造： 日本語： N1 ガ N2 ヲ V
(コウス、押ス、ナグル、コロス …)

英 語： N1 V N2

(break、push、bear [原文のまま]、kill …)

吉川(1995)は、さらにその比較を進めている(本稿の(1)では、この論考について触れなかったのが、ここで新しく加えたい)。たとえば二項動詞を日本語と英語で比較して、3つのタイプに分けている。

(I) 英語の「対格」(前置詞を用いないで直接、目的語をとる場合)が「ヲ格」と対応する。

kill a person	人ヲ殺ス
write a book	本ヲ書ク

(II) 英語の「対格」が「ヲ格」以外の格と対応する。

enter university	大学ニ入ル
influence one's health	人ノ健康ニ影響スル

(III) 「ヲ格」が前置詞と対応する。

教育ヲ専攻スル	major in education
手ヲ見ル	look at one's hands

その他さまざまな興味あることを指摘している。本稿では、これらを土台にさらにその比較を推し進めたい。

11. 比較をする前に、日本語と英語のそれぞれの対象表現の形式を別々に調べる必要がある。そうしないと片方の言語の眼鏡をかけて、他方の言語を見てしまうことになるからである。湯川(1999:4)は「ある言語の事柄を別の言語の枠組みで解釈する(もっと端的に言えば、別の言語の枠組みを押しつける)」誤りの危険性を警告している。一方山中(1998:261)は、「最初どんなに違って見える二言語も、深く見てゆくと次第に同じところが目につくという現象がある。・・・これほど遠い二つの言語があまりに似ていることにかえて奇異の感さえ抱くだろう。」という。どちらも正しいと思われる。ここで試みてみたいことは、日本語と英語のほぼ同じ領域を別々に調べてみて、その後どのくらい類似点と差異があるのかを明確にすることである。

12. 最初に日本語の「目的語」について検討する。やはり寺村(1992:267)を出発点とする。「動作・作用が他に

及んで、それに対する働きかけを表す動詞の対象を示す名詞が「～ヲ」、「～ニ」、「～ト」のどの形をとるかは、どんな基準で選択されるのであろうか。寺村は、動作の対象の中に、たとえば「(動作)の客体」「(目ざす)相手」「(相互動作の)片方」の3つのタイプがあり、それぞれ「～ヲ」、「～ニ」、「～ト」に対応すると考える。このような基準をたてると、「養ウ」、「抱ク」、「育テル」などの動詞が「～ヲ」、「反抗スル」、「カミツク」、「賛成スル」などが「～ニ」、「喧嘩スル」「仲直スル」などが「～ト」をとることが説明できることになる。

13. さらに多くの動詞を対象にした場合、上で述べた寺村の意味の基準でうまく説明ができるのであろうか。それを調べる前に『日本語基本動詞用法辞典』(大修館書店)を利用して、動詞を分類することにする。まとめると、次のようになる。

「～ヲ」をとる動詞

- (26) a. 愛スル, 諦メル, 開ケル, 上ゲル, 預カル, 預ケル, 与エル など多数
 b. 歩ク, 行ク, 越エル, 通過スル, 通ル, 這ウ, 走ル, 渡ル (いわゆる「経路」の「～ヲ」)
 c. 降リル, 出航スル, 出発スル, 退ク, 卒業スル, 脱落スル, 出ル, 遠ザカル, 免レル, 外レル, 離レル (いわゆる「出発点」の「～ヲ」, 「～カラ」と交換可能)

「～ニ」をとる動詞 (いくつかの類に仮に分けて, () の中にその基準を示してある)。

- (27) a. 及ブ, 帰国スル, 刺サル, 就職スル, 出席スル, 住ム, 座ル, 沿ウ, 近付ク, 近寄ル, 通学スル など (到達する場所)
 b. 当タル, 影響スル, 協力スル, 加ワル, 決定スル, 答エル, 応エル, 参加スル, 従ウ など (行為の向かう対象)
 c. 一致スル, 挨拶スル, 合ウ, 会ウ, 重ナル, 関係スル, 親シム, 相談スル, 対立スル, 繋ガル, 並ブ, 似ル, 比例スル, プツカル, 触レル, 混ザル, 交ザル, 分カレル, 別レル (行為の向かう対象, 「～ト」と交換可能)
 d. 変ワル, ナル, 変化スル (到達する結果)
 e. 期待スル, 悲シム, 耐エル, タメラウ

(「～に対して」という意味で, やや意味が変わるが「～ヲ」と交換可能)

- f. 劣ル, 勝ツ, 負ケル, 勝ル (相手)
 g. 欠ケル, 成功スル, 間ニ合ウ (どんな点でか)
 h. アル, イル (場所)
 i. 飽キル, 呆レル, 慌テル, 安心スル, 驚ク, ガッカリスル, 感心スル, 傷ツク, 苦シム, 苦勞スル, 悩ム, 満足スル, 迷惑スル, 酔ウ (感情の原因・理由を示し「～デ」と交換可能)
 j. 濡レル, マミレル

(原因・理由を示し「～デ」と交換可能)

「～ト」をとる動詞

- (28) 握手スル, 争ウ, 競争スル, 結婚スル, 交際スル, 異ナル, 戦ウ, 違ウ
 14. まずこのリストについての大雑把な観察をまとめてみよう。
 (i) 日本語の対象の表現形式はきわめて簡単である。基本的には「～ヲ」、「～ニ」、「～ト」の3種類である。
 (ii) 「～ヲ」が圧倒的に多く、「～ト」はわずかである。「～ヲ」が圧倒的に多いことは、必然的に「～ヲ」がいろいろな種類の対象を表現することになる。
 (iii) 「～ヲ」はもちろんであるが、「～ニ」のなかにもいろいろな種類のものが入っている。
 (iv) 寺村の意味に基づく基準である「～ヲ」は「動作の客体」、「～ニ」は「めざす相手」、「～ト」は「相互動作の片方」は基本的に正しいと思われる。

15. 次に英語の動詞の行為の対象の表現形式をここで簡単に示しておこう。英語においては、まず前置詞を取らないものと、任意のものと、取らなくてはならないものと大きく三種類に分類される。

- (29) a. He broke the teapot.
 b. He heated the cold meat.
 c. Mary dug a hole in the garden.
 d. They built a small house.
 e. He moved the chair a little.
 f. Railways and ships carry goods.
 (30) a. He attended (at) the funeral.
 b. I clutched (at) the child's hand.
 c. Japan fought (against) the US in the

World War II.

- d. He met (with) the president of the university.

- (31) a. I apologized to him for being so rude.
b. We object to the proposed new airport.
c. He will not respond to such a question.
d. I was speaking to him about my plan.

注目すべきことは、(30)–(31)のように前置詞を取る場合、日本語の「〜ヲ」「〜ニ」「〜ト」の3つと対照的に、その種類がさまざまあることである。

- (32) argue (about), rub (against), aim at, abide by, ask for, depart (from), delight in, penetrate (into), assault (on), jump (over), turn (round), permiate (through), attach to, incline toward, collide with

それでは、英語においてはどんな原理によって、(29)–(31)のように前置詞を取るのものと取らないものに分類されるのか。細かいことは、小川(1999)を参照して頂きたいが、簡単に述べてみると、動詞の示す行為によって目的語が受けるインパクトが大きいと一般に前置詞をとらない。(29a)–(29b)では目的語の状態変化が引き起こされ、(29c)–(29d)では目的語が新しく造り出され、(29e)–(29f)では目的語の位置変化が引き起こされていて、動詞の行為により、目的語が受ける影響は大きい。それに対して(30)–(31)のように目的語が動詞の行為の相手や対象を示している場合は、目的語は動詞の行為によって影響をあまり受けない。目的語に状態変化が起こるわけではないし、目的語が新しく造り出されるのでもないし、位置の変化が起こるわけでもない。その時、動詞は、一般に前置詞を取る。しかし事実は、小川(1999)で論じたようにもう少し複雑である。

16. それでは日本語と英語の比較を始めてみる。以下日本語の動詞に対応する英語の動詞を見つけるのであるが、多少恣意性が伴う。たとえば「避ける」に avoid をあてれば前置詞をとらないが、get around をあてれば、前置詞をとる。「対立スル」に conflict をあてると with を伴うが、be opposed to では、to である。このことは、頭に入れておく必要がある。

まず数が少ない(28)の「〜ト」から取りかかることにする。結論を先に言えば、日本語の「〜ト」をとる動詞とはほぼ同じ意味を持つ英語の動詞は、一般に with をと

る。

- (33) 握手スル=shake hands with; 争ウ=dispute with, quarrel with; 競争スル=compete with; 交際スル=associate with, mix with; 交渉スル=negotiate with; 戦ウ=fight (against, with); 話し合ウ=consult with, talk with

英語の with も「一緒の」の意味を持ち、「〜ト」の「相互のはたらきかけ」の意味と似ている。このことから二者がかなり一致するのであろう。

しかし一致しない例が存在する。

- (34) a. 分カレル=part from; 異ナル=differ from; 違ウ=differ from
b. 結婚スル=marry, get married to (派生名詞は marriage to)

吉川(1995:4)は、(34b)の「結婚スル=marry」について、「日英両語において対応するとされる動詞なら、動詞が表す外部世界の事実が同じだから、関与する項の数もその意味役割も同じ」とかという必ずしもそうではないと述べる。そして「marry は「働きかけ」、「結婚する」は「相互作用」というように異なっている」と指摘している。

日本語では「同ジ」「等シイ」と「異ナル」「違ウ」はどちらも「〜ト」をとるが、英語では、be similar to, be equal to に対して be different from, differ from と異なる前置詞を用いる。また「会ウ」と「別レル」も meet (with), part from のように、英語では違った前置詞によって方向性が異なることを区別している。それに対して、今見てきたように、日本語の「〜ト」は方向性を無視してしまう。

実はこのように方向性を無視して同じ表現を使うことが、日本語では他のところでも見られるのである。次の(35)–(38)のペアでは、(a)の「〜ニ」は「動作の向けられる対象」や「帰着点」、つまり対象に向かって行く意味を持つ。それに対して(b)の「〜ニ」は、「作用の出所」や「起点」、つまり対象から離れていく意味を持ち、「〜カラ」で置き換えることができる(例文は田中(1977)、山中(1998)を参考にさせて頂いた)。

- (35) a. 子供ニ留守番ヲタノム
b. 兄ニ(カラ)宿題ヲ教ワル
(36) a. 半数ニ満タナイ
b. 解決ニ(カラ)ホド速イ
(37) a. クラス代表ガ先生ニ花束ヲ渡シタ

- b. ミンナガ候補者ニ (カラ) 金品ヲモラッタ
- (38) a. ソノ川ハ黒海に注グ
b. ソノ川ハ源ヲアルプスニ (カラ) 発スル
このことは、「ヲ」についても見られる。
- (39) a. ソノ探検隊ハ未到の地ヲ目指シタ
b. ソノ船ハ南極ヲ (カラ) 離レタ
それでは、英語ではいつもこの種の方向性が表現されるのであろうか。方向が反対になる意味を持つ動詞と形容詞の対がとる前置詞を調べてみると、変わるものと同一のものと2つのタイプに分かれる。
- (40) a. near to distant from
b. close to far from
c. similar to different from
d. meet (with) part from
- (41) a. agree with disagree with
b. distinguishable from indistinguishable from
c. equal to unequal to
- (42) a. assent to dissent from
b. converge on diverge from
c. dependent on independent of
- (43) a. keep company with part company {with, from}
b. similar to dissimilar {to, from}
- 整理すると、(40) のように、語がまったく異なった対は、違う前置詞を伴う。また (41) が示すように、接頭辞をつけて変換するものは変わらないものが多い。ただし (42) のような例外がある。さらにその中間に、(43) のように前置詞が変わるのと、そのままのと、どちらとも共起するものがある。

17. 次に (27c) の「～ニ」と「～ト」の両方がとれる動詞について調べてみる。日本語では「～ニ」は一方的で、「～ト」は相互的であることがかなり明瞭に区別されている。このことは、次の例からよくわかる。

- (44) a. ～ト 話シ合ウ
b. * ～ニ 話シ合ウ
- (45) a. * ～ト 話シ掛ケル
b. ～ニ 話シ掛ケル

さて「～ニ」と「～ト」の両方をとる日本語の動詞に対応する英語の動詞は、どんな前置詞をとるのであろうか。ほとんどの場合 with か to を伴い、少数 for, on をとる。

整理すると4つのグループに分けることができる。

- with のみを伴うことができる。
- (46) 一致スル=agree with, accord with, coincide with;
会ウ=encounter, meet (with); 重ナル=overlap with; 相談スル=consult (with); 対立スル=conflict with; 混ザル=mix with, mingle with
to のみを伴うことができる。
- (47) 挨拶スル=greet (派生名詞は greeting to); 似ル=resemble (派生名詞は resemblance to); be similar to; 比例スル=be proportionate to; 並ブ=stand next to
with と to のどちらも伴うことができる。
- (48) 関係スル・結びツク=connect {to, with}, relate {to, with}; 等シイ (形容詞)=be equal {to, with まれ}; identical {to, with}
with と to 以外の前置詞か、前置詞をまったく伴わない。
- (49) 合ウ=fit, match, suit (形容詞や派生名詞は be fit for, match for, be suitable for); 触レル (接触スル)=touch; 触レル (言及スル)=touch on (ただし refer to)
to と with は、「一方的」と「相互」ということに関し、[～ニ] と [～ト] と似ている。小西 (1980: 289-297) によれば、connect は to と with の両方と共起する。
- (50) a. The police do not connect the knife with the murder.
b. A good student must connect what he reads with what he sees around him.
- (51) a. Now let's connect this wire to that.
b. They connected the boxcar to the freight train.
- (51) のように、to を伴う型は、目的語の名詞が to の後の名詞に「従属することを示唆する文脈において用いられる」と述べる。このことは、ほぼ日本語の [～ニ] と [～ト] の違いに匹敵する。
- ところがそれほどいつもはっきり区別されるわけではなさそうである。「ブツカル」・「衝突スル」には、bump {against, into}, collide with, run {against, into} が対応するであろう (例文は、*Longman Dictionary of Contemporary English* と『新編英和活用大辞典』(研究社) などによる)。
- (52) a. The two planes collided (with each other in

midair.

- b. waves colliding with the rocks
- c. collide with an iceberg
- d. I wasn't looking where I was going and
bumped into a mailbox.
- e. The boats bumped against each other in the
dock.
- f. The ship ran against an iceberg.
- g. The two cars ran into each other.

(52b)-(52c) が示すように collide with はお互いに衝突する場合だけでなく、一方的に衝突する時にも使われる。

しかしながら、基本的には、to が「一方的」、with が「相互的」とみなしてよいように思われる。これを土台にして (46) と (47) をもう一度見なおすと、日本語と英語のとらえ方の相違が明らかになる。日本語では、「～ニ」と「～ト」のどちらとも共起できるのに対して、それに対応する (46) の英語の動詞は with だけを伴い「相互的」にのみ対象をとらえている。一方 (47) の英語の動詞は to だけを伴い「一方的」にのみ対象をとらえている。言語により外界を異なる仕方とらえている例と見做すことができるだろう。

18. 次に (27a) の「到達する場所」に対応する英語の動詞について調べてみる。

to を伴う。

- (53) 及ブ=extend to; 帰国スル=return to; 近付ク・近寄ル=approach (派生名詞は approach to); 通学スル=go to school; 付ク=stick to; 入学スル=enter school (派生名詞は entrance into a school) 入ル=enter; 引ッ越ス=move to; 寄ル=move close to; 留学スル=go to ... for study

to 以外の前置詞を伴う。

- (54) 刺サル=stick in; 就職スル=get a job with; 出席スル=attend (at); 住ム=live {at, in}; 座ル=sit (in, on); 沿ウ=go along; 着ク・到着スル=arrive {at, in}; 乗ル=get (in, on); 向カウ=head for

次に (27b) の「行為の向かう対象」の動詞の前置詞を述べる。

to を伴う。

- (55) 答エル=answer, reply to; 応エル=respond to 伝ワル=spread to; 慣レル=get used to; 反対ス

ル=object to

to 以外の前置詞をとるか、まったくとらない。

- (56) 当タル=hit (at); 影響スル=influence on; 協力スル=cooperate with; 加ワル=join (with)「人」, join in「事」; 決定スル=decide on; 参加スル=participate in; 従ウ=obey; 添ウ=meet; 就ク=take; 電話スル=call (up), ring (up) (ただし make a phone call to); 同情スル=sympathize with, feel sympathy for (ただし feel sympathetic to)

(27d) の「到達する結果」は次のようになる。

- (57) 変ワル・変化スル=change to, turn to; ナル=become

(27f) の「相手」は次のようになる。

- (58) 劣ル=inferior to; 勝ツ=win [ゲームなど], beat・defeat [相手]; 負ケル=lose [ゲームなど], be defeated by [相手]; 勝ル=superior to

以上が to と関わりを持つグループである。これらを観察すると、「～ニ」をとる動詞に対応する英語の動詞がとる前置詞は、to に限らないことが明らかになる。かなり多様なのである。どうか、日本語の「～ニ」は「目ざす相手」を示すだけである。それに対して、英語は目ざす場所・対象・相手がどのようなものか、どのような仕方で見ざすのかについて区別をして表現する。

例えば「座ル」「乗ル」に対する英語は、それぞれ sit on, sit in と get (ride) on, get (ride) in であり、to ではないのである。それでは on, in によって何が表されているのだろうか。

- (59) Benjamin's father was sitting on one of the chairs. Mrs. Robinson sat back in her chair.

「on はちょっと軽く掛けるだけ、in は深く掛けるときに用いられる」と小西 (1974: 172) はいう。日本語の「～ニ」はそのような様態までは表さない。また get on は大型の乗り物 (bus, plane, ship, subway, truck) やまたがって乗る乗り物 (bicycle, horse) に、in は car, taxi など一般の車に用いられる (小西 (1976: 363-364)).

- (60) a. "Well, we got on a bus and headed for Dover."
b. We have applied to get on an airplane.
c. For a while Ghote was tempted to get on his bicycle and quickly pedal off ...
d. He got in a taxi at the corner.

arrive at と arrive in の違いは何か。広い場所と見做される場合は in, 狭い場所と見做される場合には at を

用いられる。ここでも目ざす対象の性質によって異なる前置詞が使われる。もちろん日本語ではそんな区別をせず、いつも「～ニ」である。

また join のように、目ざす対象が「人」か「事」かでも、前置詞が異なる。

(61) a. Please join with us.

b. Why don't you join in the game?

英語では「目ざす」という意味そのものを表す to や toward 以外の前置詞の場合、「目ざす」という意味は、一般に顕在化した形式で表現されない。次の文を観察してみよう(山田(1981)による)。

(62) a. The cat was under the table.

b. The cat went under the table.

英語の前置詞 under は 2 つの情况进行表現できる。(62a) は「場所」を示すのに対して、(62b) は目ざす「着点」を示す。どちらも under で表現することができる。

「場所」の前置詞が、「着点」もまた表す例を、さらにあげてみる。

(63) a. The bottle floated under the bridge.

b. The bush was the only conceivable hiding-place, so I dashed behind it.

(Quirk et al. (1972:312))

c. When it started to rain, we all went underneath the trees. (ibid.)

また、次の文では、to がなくても着点は示すことができる。

(64) a. John loaded hay on(to) the wagon.

b. Mary tossed the garbage on(to) the floor.

c. Walk in(to) the room.

d. Jump in(to) the lake.

小西(1976:363-364)は、get into について「into は car も含めて乗り物に用いられるが、無色な get に代わって、climb, crowd, pile など乗り込む動作をより生き生きと描写をする動詞とともに用いられることが多い。」と述べる。また get onto についても「乗るという動作が一層強調されることになる。」と述べる。これは to によって動作の方向性が明示されるためと思われる。

以上の観察をまとめると、次のようにいえる。日本語では「目ざす」という意味のみが形式的に「～ニ」で表現され、目ざす対象がどんなものなのか、どのような仕方

でめざすのかは、表現上は、区別されない。それに対して英語では、to, toward などを除くと「目ざす」という

意味は形式上表現されない。表現されるのは、対象がどんなものなのか、どのような仕方であるのかということである。

19. さて以下は「～ニ」をとる動詞であるが、to とまったく関わりのない類である。まず(27e)の「～に対して」を意味する「～ニ」をとる動詞に対応する英語を調べてみよう。

(65) 期待スル=expect...of, expect, hope for; 悲シム=

grieve {at, for, over}; 耐エル=bear, stand, endure; タメラウ=hesitate

(27g)の「どんな点でか」を示す類。

(66) 欠ケル=lack; 成功スル=succeed in; 間ニ合ウ=

be enough for

(27h)の「場所」を示す類。

(67) アル・イル=be {at, in, on, under など}

(27i)の「感情の原因・理由」を示し「～デ」と交換可能

の類。

(68) 飽キル=be {tired of, bored with}; 呆レル=be

astonished {at, by}; 慌テル=be confused {by, with}; 安心スル=be relieved at; 驚ク=be surprised {at, by}; ガッカリスル=be disappointed {at, with}; 感心スル=be impressed {by, with},

admire; 傷ツク=be hurt by; 苦シム=be troubled by, suffer from; 苦勞スル=have trouble with; 悩ム=be worried about; 満足スル=be satisfied with; 迷惑スル=be annoyed {by, with};

酔ウ=be intoxicated {by, with}

(27j)の「原因・理由を示し「～デ」と交換可能」の類。

(69) 濡レル=be wet {from, with}; マミレル=be covered with

ered with

(68)と(69)は、ほぼ英語では受身形に対応している。このような原因・理由を示す時に、日本語では「～ニ」が使われるのはなぜなのだろう。「一方的な対象」を意味する「～ニ」がなぜ(65)-(69)のような場合にも用いられるのか。同じ「～ニ」なのか。これは将来の問題としたい。山梨(1993)、仁田(1995)、竹沢(1995)などが参考になるのではないと思われる。

20. 最後に圧倒的に数が多い「～ヲ」について調べてみよう。まず(26a)の例を検討してみる。2つのグループに分けることができる。英語の動詞が前置詞をとらな

い場合が圧倒的に多い。(最初の方の日本語の動詞のみ
対応する英語を示す)。

- (70) 愛スル=love; 諦メル=give up, abandon; 開ケル=open; 上ゲル=raise; 預カル=keep; 預ケル=leave, entrust; 与エル=give; 暖メル=warm; 扱ウ=treat; 集メル=collect, gather; 洗ウ=wash; 改メル=change; 案内スル=guide; 生カス=keep...alive, make the best use of; 頂ク=receive; 痛メル=hurt, injure; 意味スル=mean; 祝ウ=celebrate; 植エル=plant; 浮ベル=float; 受ケ取ル=receive; 動カス; 失ウ; 歌ウ; 疑ウ; 奪ウ; 生ム; 売ル; 運転スル; 運ブ; 遠慮スル=reserve; 終エル; 置ク; 送ル; 落トス; 覚エル; 思イ出ス; 解釈スル; 買ウ; 書ク; 隠ス; 囲ム; 飾ル; 我慢スル; 借リル; 乾カス; 歓迎スル; 完成スル; 記憶スル; 着セル=dress; 許可スル; 嫌ウ; 切ル; 着ル; 禁止スル; 配ル; 繰り返ス; 計画スル; 経験スル; 消ス; 決心スル; 研究スル; 検査スル; 建設スル; 見物スル; 後悔スル; 試ミル; 断ル; 殺ス; 壊ス; 避ケル; 下ゲル; 誘ウ; 叱ル; 試験スル; 沈メル; 実現スル; 実行スル; 指導スル; 支配スル; 閉メル; 修理スル; 準備スル; 使用スル; 招待スル; 知ラセル; 調べル; 知ル; 信ジル; 吸ウ; 進メル; 捨テル; 整理スル; 責メル; 選択スル; 掃除スル; 想像スル; 育テル; 尊敬スル; 倒ス; 炊ク; 抱ク; 確カメル; 助ケル; 訪ネル; 建テル; 楽シム; 食ベル; 試ス; 注文スル; 使ウ; 捕マエル; 掴ム; 作ル; 伝エル; 続ケル; 包ム; 潰ス; 訂正スル; 手伝ウ; 屈ケル; 止メル; 取ル; 直ス; 眺メル; 無クス; 投ゲル; 習ウ; 並ベル; 逃ガス; 握ル; 憎ム; 煮ル; 脱グ; 盗ム; 塗ル; 残ス; 述ベル; 飲ム; 計ル; 穿ク; 始メル; 発見スル; 発明スル; 生ヤス; 貼ル; 否定スル; 開ク; 拾ウ; 拭ク; 防グ; 勉強スル; 報告スル; 干ス; 掘ル; 曲ゲル; 招ク; 守ル; 磨ク; 迎エル; 用イル; 持ツ; 燃ヤス; 貰ウ; 止メル; 譲ル; 輸入スル; 許ス; 用意スル; 要求スル; 汚ス; 止ス; 予想スル; 理解スル; 利用スル; 沸カス; 忘レル; 割ル

これに対して, (26a) の中で前置詞をとるのは, わずかである(このように「～ヲ」が前置詞と対応する類について, 意味による下位分類が吉川(1995)で試みられ

ている)。

- (71) 祈ル=pray for; 怒ル=get angry at; 押ス=push {at, on}; 語ル=talk about; 考エル=think of; 聞ク=listen to; 希望スル=hope for; 欠席スル=stay away from, be absent from; 指ス=point to; 受験スル=apply to; 主張スル=insist on; 信仰スル=believe in, have faith in; 心配スル=care about; 攻メル=attack (on); 叩ク=hit {at, on}; 突ク=poke (at); 願ウ=wish for; 望ム=want, wish for; 引ク=pull {at, on}; 踏ム=step on; 待ツ=await, wait for; 見ル=look at, see; 練習スル practice (on); 予定スル=plan (for); 喜ブ=be glad at, rejoice at

それに対して, (26b) のいわゆる「経路」の「～ヲ」はすべて前置詞をとる。

- (72) 歩ク=walk (along); 行ク=go along; 越エル=cross (over); 通過スル=pass (by); 通ル=go through; 飛ブ=fly (over); 這ウ=creep on; 走ル=run (along); 旅行スル=travel (over); 渡ル=cross (over)

(26c) の「～カラ」と交換可能である, いわゆる「出発点」の「～ヲ」に対する英語の動詞も, 同じように前置詞をとる。

- (73) 降リル=descend from; 出航スル=sail from; 出発スル=depart (from); 退ク=withdraw from; 卒業スル(「カラ」と交換は不可)=graduate (from); 脱落スル=drop out of; 出ル=go out of; 遠ザカル=go away from; 免レル=escape (from); 外レル=stray out of; 離レル=separate from

21. 「～ヲ」をとる動詞は非常に多い。それ故こまかく分類していくことは, 難しい。国広(1967:223)は「ヲ」の本質の意味を「《動作・作用の対象を示す》の1つだけを仮定すれば十分である」と捉えている。それをふまえて, 山田(1981:70)は, 「ヲ」自体に「経路」ないし「出発点」という意味特徴が含まれていることは妥当でないと見做し, 「ヲ」が「行為の及ぶ範囲」を示すと規定している。田中(1997:30)も国広・山田の方針に基本的にしたが「～ヲ」は〈～を動作が作用する対象として取り立てよ〉という意味づけの仕方の要請を行なう助詞であると見做す。また湯川(1999:144-146)は, 助詞の

「ヲ」が表す事象は、切れ目なく連続していて、区切れないことを指摘している。

これら見解に対して、ひとつ考慮しなければならない現象がある。それを用いて、「～ヲ」を形式的に下位分類することが、もしかするとできそうなのである。

文において動詞と結ぶ「～ヲ」は、その動詞に対応する名詞形では一般に「ノ」に対応する。ところが常にそうなるわけではない。杉岡(1989:167-168)に耳を傾けてみよう。それによれば、格助詞は文法格を表す「ガ」「ヲ」と意味格を表す「ニ」「カラ」「ト」「ヘ」に分かれる。名詞+格助詞が別の名詞と共に現れる時は、「ノ」が挿入される。ただし文法格の場合は、削除されてしまう。

- (74) a. 花子が帰宅スル 花子ノ帰宅
b. 事件ヲ調査スル 事件ノ調査
c. 車ヲ運転スル 車ノ運転

「～ヲ」は「～ノ」に対応することになる。

一方、意味格の場合は、格助詞はそのまま残り「ノ」が後に続く。

- (75) a. 東京カラ出発スル 東京カラノ出発
b. 花子ト結婚スル 花子トノ結婚
c. アジアヘ進出スル アジアヘノ進出

ただ「ニ」についてはどういうわけか「ニノ」にならず「ヘノ」になってしまう。

- (76) a. 火星ニ接近スル 火星ヘノ接近
b. 表ニ追加スル 表ヘノ追加

しかし杉岡(1989:184)は、「ヲ」をとるにもかかわらず「ノ」でなく「ヘノ」に対応する「重要な例外(?)」が存在することを指摘している。

- (77) a. 花子ヲ {励マス, 恨ム, イタワル, 疑ウ, 誘ウ}
b. 花子ヘノ {励マシ, 恨ミ, イタワリ, 疑イ, 誘イ}

これらは、もし「ノ」をとると、主格の「ガ」に対応してしまう。

- (78) a. 花子ガ {励マス, 恨ム, イタワル, 疑ウ, 誘ウ}
b. 花子ノ {励マシ, 恨ミ, イタワリ, 疑イ, 誘イ}

この点が杉岡で新しく指摘されていることであるが、さらに観察を進めてみよう。まずこのグループのメンバーはもっと増やすことができる。

- (79) a. ～ヲ {尊敬スル, 恐れル, 援助スル, 攻撃スル, 支配スル, 妨げる}
b. ～ヘノ {尊敬, 恐れ, 援助, 攻撃, 支配, 妨げ}

またこのことは「ヘノ」にのみ限られるのではない。「ノ」の代わりに「カラ」をとるものがある。いわゆる「出发点」の「～ヲ」である。

- (80) a. 東京ヲ出発スル
b. 東京カラノ出発
c. *東京ノ出発
(81) a. アパートヲ引ッ越ス
b. アパートカラノ引ッ越シ
c. *アパートノ引ッ越シ

それに対して「経路」の「～ヲ」は「～ノ」になる。

- (82) a. ソノ町ヲ通過スル
b. ソノ町ノ通過
(83) a. ヨーロッパヲ旅行スル
 ヨーロッパノ旅行

どのような基準により「～ヲ」をとる動詞がこのように分かれるのか調べる必要がある。これについては、次の機会に譲りたい。

22. この日本語の現象とよく似た現象が英語においても見られる。動詞の派生名詞がとる前置詞について考えてみよう。(84)のように前置詞を伴わない動詞の派生名詞は一般に of を伴う。

- (84) a. destroy destruction of
b. construct construction of
c. create creation of
d. convey conveyance of
e. transport transportation of

それに対して動詞が前置詞を伴う場合は、その派生名詞は、動詞と同一の前置詞を伴う。

- (85) a. attend (at) attendance at
b. meet (with) meeting with
c. apologize to apology to
d. object to objection to
e. respond to response to

ところが前置詞をとらない動詞にもかかわらず、その派生名詞が of 以外の前置詞をとるものがある。

- (86) a. admire admiration for
b. greet greeting to
c. help help to
d. need need for
e. regret regret for

派生名詞まで考慮すると、前置詞をとらない動詞は

2種類に分かれるのである。「～ヲ」をとる動詞と英語の前置詞をとらない動詞は、その動詞の名詞形まで考慮すると、さらに下位分類できるのである。

23. もうひとつ触れておきたい問題がある。今まで調べてきたように、日本語では「目的語」を表現するのに「～ヲ」「～ニ」「～ト」とまことに大雑把であるのに対して、英語では、さまざまな前置詞を用いて細かく表現する。このこととパラレルなことが別のところで見られる。日本語では二つの名詞を「～ノ」で常に結合することができる。そしてその二つの名詞の間には多様な意味関係が見られる。森(1993)を参考にして、あげてみる。()の中に意味関係を示す。

(87) 母の株券(所有); クラブの会員(所属); NHKの番組(作者); PTAのバザー(主催者); 風邪の熱(起因); 朝の番組(時); 春の到来(主格); サン格拉斯の男(付帯物); お茶の缶(内容物); 風邪の薬(用途); 二匹のこぶた(数量); 額の汗(所在場所); 海外の生活(行動場所); 会期の延長(目的格)

それに対して、英語では二つの名詞を結合する時、of が用いられることが多いが、それ以外のさまざまな前置詞が使われる。松岡(1996)の表を利用させて頂く(元々は『研究社新和英大辞典』の「の」の項が土台になっているとのことである)。

- | | |
|---------------|---|
| (88) a. 東大の教授 | a professor at Tokyo University |
| b. 師弟の関係 | the relations between teacher and pupil |
| c. 漱石の小説 | a novel by Soseki |
| d. 頭痛の薬 | a medicine for headache |
| e. 岡山の梨 | pears from Okayama |
| f. 代数の試験 | an examination in algebra |
| g. 英文の手紙 | a letter in English |
| h. 英語の先生 | a teacher of English |
| i. 15才の少女 | a girl of fifteen |
| j. 生物学の権威 | an authority on biology |
| k. 隅田川の橋 | a bridge over the Sumida River |
| l. 裏口の鍵 | a key to the backdoor |
| m. 赤鼻の人 | a man with a red nose |

このように、名詞と名詞を結合する時も、対象の表現形式と同じように日本語は大雑把であるのに対して、英

語は細かいのである。

24. 対象を示す場合も、名詞を結合する場合も日本語は大まかで、英語が細かいのは、助詞の数が少なく、前置詞の数が多くことと連関する。

田中章夫(1977:362)は、助詞を「格助詞」「係助詞」「副助詞」「並立助詞」「接続助詞」「終助詞」「間投助詞」の7つに分類しているが、前置詞にもっとも良く対応しているのは、「格助詞」である。そして格助詞を3種に整理している。

主格助詞……判断や動作・状態などの主体を示す。

ガ

連用格助詞……動作・作用の、場・対象・目的・手段などを示す

ヲ・ニ・ヘ(動詞の目的語)

デ・カラ・ヨリ・マデ

ト

連体格助詞……体言性の語句を限定する。

ノ

格助詞の数はそんなに多いわけではない。このなかで特に対象を表す格助詞は「ヲ」、「ニ」、「ヘ」、「カラ」、「ト」である。

一方英語のほうは、前置詞全体の数は、格助詞と比べると圧倒的に多い。対象を表すために使われるのは、そのなかの一部であるが、それでもはるかに多い。このことは英語のほうが細かく分類する手段を有していることになる。

以上本稿では、対象の表現形式に関して、日本語と英語を比較してみた。残された問題は多いと思われるが、次の機会に調べてみたい。

参考文献

- 小川 明 (1999) 「動詞に伴う前置詞 — 意味から見た統語現象」 稲田俊明・岩部浩三・大庭幸男・水光雅則・武本雅嗣・西村秀夫 編 『言語研究の潮流』 83-96, 開拓社.
- 国広哲弥 (1967) 『構造的意味論』 三省堂.
- 小泉 保・舟城道雄・本田島治・仁田義雄・塚本秀樹 編 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店.
- 小西友七 (1974) 『英語前置詞活用辞典』 大修館書店.
- 小西友七 (1976) 『英語の前置詞』 大修館書店.
- 小西友七編 (1980) 『英語基本動詞辞典』 研究社出版.
- 杉岡洋子 (1989) 「派生語における動詞素性の受け継ぎ」 久野 暉・柴谷方良 編 『日本語学の新展開』 167-185, くろしお出版.
- 竹沢幸一 (1995) 「「に」の二面性」 『言語』 11 月号, 70-77, 大修館書店.
- 田中章夫 (1977) 「助詞(3)」 『岩波講座日本語 7 文法 II』 359-454, 岩波書店.
- 田中茂範・松本 曜 (1997) 『空間と移動の表現』 日英語比較選書 6, 研究社出版.
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 II 言語学・日本語教育編』 くろしお出版.
- 仁田義雄 (1995) 「格のゆらぎ」 『言語』 11月号, 20-27, 大修館書店.
- 松岡博信 (1996) 「前置詞「of」の論理性と連体助詞「の」の超論理性について — 句構造の階層性の有無に焦点をあてて」 安田女子大学『英語英米文学論集』 5, 113-122.
- 森捨信 (1993) 「日本語の「甲の乙」名詞句」 『言語』 8 月号, 82-85, 大修館書店.
- 山田 進 (1981) 「機能語の意味の比較」 国広哲弥編 『日英語比較講座 第3巻 意味と語彙』 53-99, 大修館書店.
- 山中桂一 (1998) 『日本語の形』 東京大学出版会.
- 山梨正明 (1993) 「格の複合スキーマモデル — 格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」 仁田義雄編 『日本語の格をめぐる』 39-65, くろしお出版.
- 湯川恭敏 (1999) 『言語学』 ひつじ書房.
- 吉川千鶴子 (1995) 『日英比較 — 動詞の文法 — 発想の違いから見た日本語と英語の構造』 くろしお出版.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Clarendon Press.

Summary

This article attempts to present a contrastive analysis of differences in the expression of sentence object between Japanese and English. I have argued that compared with Japanese, English has a complex system to indicate object. For that purpose, English makes use of a large number of prepositions. By contrast, Japanese has a small number of object particles called *kaku joshi*: *wo*, *ni*, and *to*. The three particles are listed in the order of frequency of use, with *wo* overwhelmingly exceeding the other two. This striking contrast between Japanese and English is also found in the formation of noun phrases. For combining two nouns Japanese usually employs a single particle *no*, whereas English uses a variety of prepositions.

A comparison of the *joshi* and prepositions reveals some regularities. For instance, the particle *to* almost always corresponds to the preposition *with*, whereas the particle *ni* corresponds to a variety of prepositions; and the *wo*-taking verb of Japanese is usually equivalent to the transitive verb of English.